

岡山シティミュージアム 常設展内企画展示

## 坪田譲治とびわのみ文庫

会期 令和3年2月16日～3月7日、13日～28日

会場 岡山シティミュージアム 5階常設展示室

第36回坪田譲治文学賞の発表にあわせて、岡山市出身の文学者、坪田譲治が東京都内の自宅敷地に設けた児童文庫「びわのみ文庫」の資料（当館蔵）を展示し、ここで行われた文庫と児童文学雑誌『びわの実学校』の編集活動を紹介します。

坪田譲治は昭和36年に東京都西池袋にあった自宅の敷地内に児童文庫「びわのみ文庫」を設け、昭和38年からそこで児童文学雑誌『びわの実学校』を編集発行して戦後日本の児童文学を担った多数の作家を育てました。

平成22年に「びわのみ文庫」が惜しまれつつ取り壊されたとき、文庫にあった家具や備品などの資料の一部が所有者のご厚意により、岡山シティミュージアムなどに寄贈されました。

そこでこのたびは、その中から「びわのみ文庫」で行われたさまざまな活動と、『びわの実学校』誌の発行にかかわる資料を展示して、晩年の坪田譲治が情熱を注いだ事業とその広がりを紹介しています。



展示の情景（右手に見えるのは「びわのみ文庫」の表札看板）

## 「びわのみ文庫」の1階閲覧室

「びわのみ文庫」は坪田譲治が昭和31年まで居住し、書齋にしていた東京都西池袋（当初の地名表記は雑司ヶ谷）の自宅の敷地内に昭和36年4月に建てた児童書と児童文学研究書の文庫で、活動は昭和36年7月から始まり、坪田譲治の蔵書を近隣の子どもたちや児童文学を研究する学生・研究者のために開放したものでした。

文庫の運営は坪田譲治の長男の坪田正男氏とその妻の坪田きね子氏が担い、早稲田大学などで児童文学を研究する多数の学生がボランティアで手伝いました。

発足当初は児童書や児童文学研究書の充実した図書館が他になかったため、利用は多く、貴重な存在であったと伝えられています。

文庫の建物は坪田譲治自身が設計し、知り合いの建築家が実現したもので、内・外装は赤茶色の落ち着いた色調に統一され、家具にも品格がありました。

この閲覧室の奥に書庫があり、その外に『びわの実学校』誌のバックナンバーを保管していた倉庫がありました。閲覧室と書庫の間にある階段を上がると、2階には6畳間の書齋と3畳間の休息室がありました。



### 1階閲覧室の再現

この中で、白いソファは資料搬出時に新しいものと替わっていたため、搬出していません。そのため展示では、当館の備品で補い、小机の用途を示しています。

そのほかの家具や備品は、「びわのみ文庫」から搬出し、保存しているものです。

なお、家具などの位置は絶えず変わっていたと考えられ、展示はある特定の時期の状態を正確に再現したものではありません。

## 「びわのみ文庫」の解体と備品などの受贈

平成 22 年 12 月、関係の方々の努力で維持されてきた「びわのみ文庫」の建物が、とうとう近く解体されるという知らせが坪田譲治文学を研究されているノートルダム清心女子大学教授、山根知子先生からもたらされました。「びわのみ文庫」を後世に伝えるため、坪田譲治の故郷の岡山で調度品や備品の保存を引き受ける用意がある旨を、先生から所有者に伝えて頂いたところ、賛同を頂いたため、当館では事前の下見の上で急遽費用を工面し、トラック 1 台をやっと仕立てて現地へ向かいました。

解体工事まで 1 週間程と迫った中での作業でしたので、坪田譲治が直接かかわったと考えられる当初の内装を復元できる資料を即断即決で選び、トラックに積み込みました。その際は建物の所有者や近隣の方々が駆けつけ、昔の記憶をたどりながらさまざまな有意義な情報を教えて下さったので、1 日しかない限られた時間の中で、どうにか貴重な資料を選び出すことができました。

十分な準備もなく、戸惑いながらの作業でしたが、とうとう日没となり、運送会社のスタッフに促されて現場を後にしました。

このとき 1 階の閲覧室からは、床と壁面の化粧材で当初の色彩がよく残っている箇所を切り取ったほか、カーテンや扉なども一部ずつを外しており、それらをサンプルとして将来に室内の復元もできるように備えています。

寄贈された図書や家具や備品などは、当館とノートルダム清心女子大学附属図書館で保存しています。



右：「びわのみ文庫」の壁面と床面の化粧材のサンプル

(色彩の残りのよい箇所を保存して、室内の詳しい復元もできるように備えています)

左：「びわのみ文庫」のカーテン

(東と南に小さな窓があり、西は全面がガラス戸で明るく、天窗もありました)

## 児童書と児童文学研究書の文庫として

「びわのみ文庫」の初期の活動は、坪田きね子氏が『びわの実学校』へ記した寄稿文からうかがえます。

それによると、図書館の業務を習得していた 2 人の手伝いがあるって図書目録などが整備され、早稲田大学などで児童文学を研究している学生たち多数の応援があるって、活動は行われていました。当初は閲覧だけに限っていましたが、やがて貸出しを始めると利用は大きく増えていきました。

「びわのみ文庫」の図書は、坪田譲治が購入したり出版社から贈られたりして所蔵していた多数の蔵書を開放したものでしたが、当時は児童書や児童文学の研究書を豊富に収蔵している図書館がまだなかったため、当時大学生だった人たちも、よく揃っている書物を用いて勉強ができたと言っています。

「びわのみ文庫」では、クリスマス会や、もちつきなどの四季折々の行事を行いました、軽井沢などへ泊まりがけでキャンプに行くことも行いました。

かつて鈴木三重吉が『赤い鳥』で子どもたちに綴り方の指導を行いました、この「びわのみ文庫」でも文章の書き方の指導をして、謄写版刷りでキャンプへの参加記などの文集を作成しました。



軽井沢や秋川へのキャンプで用いられた飯ごうとテント用品

キャンプの思い出を書いてまとめた文集



正月の餅つきで使用した臼と杵



「びわのみ文庫」が開設した昭和 36 年の  
クリスマス会のポスター



卓球ラケット、なわとび、チェスなど  
読書の合間の遊戯の様子がうかがわれます



宮川ひろ『るすばん先生』による紙芝居  
『びわの実学校』誌で発表された名作童話です



「びわのみ文庫」のさまざまな蔵書印の紹介



個人登録カードなど（個人情報是非公開）



左：案内ハガキ用の謄写版印刷機

右：掲載作品の目録

「びわのみ文庫」の運営は、図書館業務に通じた2人のボランティアスタッフの助力で行われましたが、図書カードの整備をはじめ、さまざまな図書館活動が本格的に行われています。

掲載作品目録は、「びわのみ文庫」の蔵書について、雑誌や全集などに掲載された作品まで拾い上げて著者別にまとめた目録で、児童文学の研究者にとっては大変便利な台帳でした。

## 児童文学雑誌『びわの実学校』

坪田譲治は、短編小説集『正太の馬』で文壇にデビューした後、早稲田大学の先輩の鈴木三重吉が主宰する雑誌『赤い鳥』に、挿絵を描いていたデザイナーの深沢省三氏らの紹介で童話を投稿するようになり、少しずつ名を知られていきました。三重吉は譲治の文に添削を加えて厳しく指導しましたが、譲治はそのことを感謝し、生涯にわたり三重吉を師と仰ぎました。

昭和 11 年に鈴木三重吉が亡くなると『赤い鳥』は終刊になりましたが、戦後、坪田譲治はその精神を受け継ぐことを思い、児童文学者の関英雄氏の勧めもあって、昭和 38 年から「びわのみ文庫」を編集の場として、私財により児童文学雑誌『びわの実学校』を発刊しました。

この雑誌から多くの若手児童文学者が育ち、戦後日本の児童文学を担っていきますが、「びわのみ文庫」での編集は 65 号まで続きました。その後は東京都東久留米市の三男、理基男氏の家に近い坪田譲治の書齋が編集の場となり、発売は講談社が引き受けました。

『びわの実学校』の表紙のデザインは、版画家の山高登氏が創刊号から最終号まで一貫して受け持ちました。

隔月で発行された『びわの実学校』は、昭和 57 年 9 月の 113 号が坪田譲治の追悼号となり、昭和 61 年の 134 号までで第一期を終え、以後も一部の同人によって第二期として季刊で続けられましたが、平成 8 年に終刊となりました。



「びわのみ文庫」から引き継いだバックナンバーを並べて展示しています。

65 号までは「びわのみ文庫」で作成されたため、欠けることなく残っていますが、発売を講談社が引き受けた 66 号以降は欠けているところがたくさんあります。

山高登氏による美しい表紙デザインを見ることができます。

## 『びわの実学校』の挿絵を描いた画家たち

すべての号にわたって表紙のデザインを担当した山高登氏のほかにも、多数の画家が『びわの実学校』の目次や本文のページに添えられた挿絵を描きました。

『びわの実学校』の目次などに目を通すと、井口文秀、市川禎男、北島新平、久米宏一、小林和子、斎藤博之、しのおすみこ、須田寿、瀬川康男、高志孝子、田代三善、多田ヒロシ、田畑精一、佃公彦、永井保、中谷千代子、深沢紅子、深沢省三、松谷春男、松本いちら、間所すずこ、やべみつのり、山内洋美、山田三郎、若林利代、和歌山静子の各氏をはじめとする、多数の著名な画家やデザイナーの名前が見られます。

雑誌に掲載された童話は、やがて単行本になって出版されることがありますが、そのときも同じ画家が装丁や挿絵を担当することが多いので、私たちは、ここにあげた画家の作品を普段から多数の童話や絵本で目にしていることでしょう。

「びわのみ文庫」には、何かの展示会に用いたからかも知れませんが、第7号と第9号の挿絵の原画がまとまって保存されていました。それらも建物の解体を前にして他の資料といっしょに搬出しましたので、紹介しています。



第7号と第9号でそれぞれコーナーを設けて、「びわのみ文庫」から搬出した原画と掲載誌を並べて展示しています。

## 『びわの実学校』で坪田譲治と関わった文学者たち

「びわのみ文庫」にあった多数の書物の多くは坪田譲治が歿した直後に、譲治の長男の坪田正男氏と三男の坪田理基男氏から岡山市立中央図書館などへ寄贈されています。しかし子どもたちが盛んに利用したために少々傷んでいるような本は現地に残されていたので、当館にも少なからぬ本が収蔵されました。

その多くは1階の閲覧室を復元したコーナーで本棚へ収めて展示しましたが、『びわの実学校』を通じて坪田譲治と関係のあった児童文学者の書物も多く、当館に本が来ている方々の中から14名を選んで展示しました。これを見ると、『びわの実学校』の同人や、投稿者となって深い関係を持ち、坪田譲治の影響や薫陶を受けた児童文学者の人数がいかに多く、戦後の日本の児童文学で大きな広がりをもっているかがわかります。

展示では、「びわのみ文庫」に著書が残っていたため、それらが当館へ引き継がれている作家の中から、第一期の『びわの実学校』への作品発表がある、あまんきみこ、今西祐行、大石真、岡野薫子、神沢利子、砂田弘、高橋健、寺村輝夫、鶴見正夫、松谷みよ子、宮川ひろ、宮口しづえ、宮脇紀雄、与田準一の各氏と、動画映像に登場する千葉幹夫氏の本（びわのみ文庫の旧蔵書）を展示しています。

しかしそのほかにも、安房直子、今江祥智、岩崎京子、岡林節子、岡本良雄、沖井千代子、小田獄夫、小林純一、阪田寛夫、庄野英二、杉みき子、関英雄、竹崎有斐、千葉幹夫、坪田理基男、永井萌二、中川李江子、野長瀬正夫、前川康男、宮川やすえ、椋鳩十、山下明生、山下清二、米川みちこの各氏など、数えきれないほど多くの作家が『びわの実学校』誌へ寄稿・投稿をし、重要な関わりをもっています。



「びわのみ文庫」の蔵書印のある、文庫から搬出した図書で坪田譲治と関わりのあった文学者を紹介しています。

## 「びわのみ文庫」の2階の書斎

坪田譲治は日曜日を除いた毎日、東久留米から西池袋の「びわのみ文庫」に通っていました。ここに展示した座卓と筆箱は、「びわのみ文庫」の2階にあった6畳間の書斎を再現したものです。書斎には床の間があり、その脇の収納庫には、坪田譲治と交友のあった作家や芸術家や学者から贈られたものとみられる書画が収められていました。

階段を挟んだ南側には、坪田譲治がごろんと横になって休んだと伝えられる3畳間がありましたが、2階は日差しが強いために内装の傷みが激しく、3畳間の襖の紙はすべて原型をとどめていませんでした。ここには展示していませんが、北側にあった書斎からは、比較的状态のよい襖を1枚、建物の復元に備えて保存しているほか、床の間の柱や棚も取り外して残しています。



展示室の最後のコーナーには、2階六畳間（書斎）の資料を展示しています。



書齋の座卓の上にあった、松谷春男氏（松谷みよ子氏の兄で、漆芸家）が制作した硯箱  
搬出のときには硯は見当たりませんでした。

坪田譲治は「びわのみ文庫」の活動があった頃は、おもに東久留米市にあった三男、理基  
男氏の家隣接する書齋で原稿を執筆していたとのことで、ここにある筆は色紙などに揮  
毫するためのものようです。



書齋の床の間の脇には作り付けの収納庫があり、坪田譲治と交友のあった多数の文学者  
や画家の書画が保存されていました。その中から、今回は『びわの実学校』に挿絵を描いて  
いた山高登、須田寿、山田三郎の3氏の作品（版画、油彩画）を展示しています。

展示台の上に置いているものは、それぞれ山高登氏と山田三郎氏による、『びわの実学校』  
の第7号と第4号に掲載された挿絵の原画です。

## 坪田譲治とふるさと岡山

「びわのみ文庫」の発想は、どこからきたのでしょうか。『赤い鳥』などを含め、いろいろな契機があったと考えられますが、故郷岡山での体験にも、ひとつの手掛かりが残されています。

坪田譲治の出身地、岡山県御野郡石井村島田（現岡山市北区島田本町）には、彼の父の平太郎と共同で事業を行った永原収次郎という人があり、子どもの頃の譲治はその子息の愛二氏と親しくしていました。旧士族であった永原家には書物が多くあり、12歳の頃（明治35年）にここに通ってそれらを読みふけていた譲治は、後年に「永原文庫」と呼んで文学的出発の地として感謝していたことを、坪田譲治の文学を研究されているノートルダム清心女子大学の山根知子先生が、論文「坪田譲治 作品の舞台 一島田一」（『ノートルダム清心女子大学紀要』第27巻、第1号（通巻38号）、2003年、45～57頁）の51～52頁で指摘されています（先生からのご教示）。

こうした子どもの頃の体験が「びわのみ文庫」まで引き継がれているとしたら、その活動には彼の息の長い一貫した思いが込められているのかも知れません。

「びわのみ文庫」からの資料搬出にあたり、貴重な資料を当館へご寄贈いただいた所有者（当時）の皆様と、資料搬出とこの展示の開催にあたり多くのご教示をいただきました山根知子先生に御礼を申し上げます。



